

10. 試練に耐える強い意志

“体罰”は幼児期に

「幼児期に厳しい躰を」と申しましたが、それは、まだ判断力の出来上がっていない幼児ゆえに、身体で覚えさせるしか方法が

ないからでした。そうすることによって、身体が自然とそのように、つまり美しく動くようになる、ということで“躰”という字も作られたわけです。

幼児というものは、だれでも実に辛抱強い性質を持っているものです。例えば、這い這いを始めるようになりますと、どんな障害でもこれを乗り越えて進もうと、努力して止みません。また、立って歩くことを始めますと、どんなに転んで痛い目にあっても「もう歩くことは止めた」と言って諦める赤ちゃんは、一人だってあったためしがありません。

それはどんな子供でもそうなのですから、子供はみんな強い意志を持っていて、どんなに厳しい試練にも耐え抜けるように、初めから生れついているのだと、つくづくそう感じさせられます。だから、幼児を躰けるにあたっては、幼児への思いやりから厳しさに欠けるようでは、反って子供のためにならないわけです。

こういう厳しい躰によって、立派な行動が自然と出来るようになりますと、周囲から褒められますし、それが自信につながり、自分の判断力で自主的に行動するように成長していきます。よく放ったらかしにしておけば自主性が伸びる、と言う教育者がいます。とんでもないことです。

スピードのある車ほどブレーキが肝腎のように、能力の高い人間には自制心が特に肝腎です。せっかく立派な大学を出て、広い知識や高い能力を身に付けながら、自制心が弱いために悪の誘惑に負けて、身を亡ぼす者が少なくありません。

その原因は、幼児期にわがまま一杯に育てられ、思うがままに生きてきて、自分の欲望を抑えるということの重要さを、親から全く教えられなかった、ということに因るものが多いようです。

三つ子の魂百までも。幼児期にその人の性格が出来るのですから、親としてはこの時期に最善を尽すことが必要です。親が最高の教師になれるのは、この重要な時期を親が預かっているからです。

個性らしいものが現れてくるのは三歳頃からですが、厳しい躰は三歳頃までに終るようにすることが望ましいことです。それは、その頃ま

でが最も受容性に優れていて自然に身に付き、またどんな厳しさにも最もよく耐えられる時期だからです。

コラム

部首 頁

首(八)から上“あたま”を表す部首。昔から「大貝」と呼ばれるがかおづくり「顔旁」と呼びたいもの。

【頂】 丁と頁との会意形声字。“頭のいただき”が本義。目上の人から物を受取る時は頭の頂きの高さにまで手を上げるので、「頂戴する(いただく)」と言う。「山頂(山の頂き)」は転用。

【頃】 後の意味の工と頁との会意形声字で、“後頭部”が本義。急所なので“大切なところ”という意味。